

公益財団法人日米医学医療交流財団 アメリカ短期看護研修助成

研修報告書 (2018年度 助成者)

作成日 2018年10月28日

氏名 (フリガナ)	佐藤 藍 (サトウ ラン)
研修地	アメリカ・オレゴン州ポートランド市
研修期間	2018年10月7日(日)～10月13日(土)
所属機関名 身 分	自治医科大学附属さいたま医療センター 救命救急センター
<p>今回、海外看護研修として1週間アメリカのポートランドに参加させて頂きました。研修の受講動機としては救命センターで働く上で外国人患者を診療する場面に出くわしたことが数度あり、今後円滑なコミュニケーションを取りたいと思った事、海外で働く看護師に以前から興味を持ったためこの機会に経験したいと思ったからです。研修期間は1週間でしたが看護師の役割や病院での働き方、施設運営について多くのことを学ばせて頂き、貴重な経験をすることができました。その中でも特に印象に残った3点について下記にまとめます。</p> <ul style="list-style-type: none">・1点目はアメリカにおける看護師の役割は日本の看護師と違うところがあつたことに驚きました。アメリカでの看護師は医師と対等の立場で意見を言えたり、処置をしていることです。そのような事が実現出来るのもアメリカにおける看護師への教育や知識、技術面への支援があること。また看護学生時期での徹底したシミュレーションの研修があることでより実践的な行動を実現できていると感じました。 <p>また日本では聞き慣れない「マグネットホスピタル」という制度があり、看護師の離職率について研究を始めたところから制度が出来上がったと聞きました。また、この制度によって質の高い看護ケアを提供することや働きやすさについて追及し、看護師の指標となる所も素晴らしいと感じました。認定された場所で働くことで看護師のキャリアアップややりがいができること、他の医療スタッフからも信頼されチーム医療にも繋がることでより質の高いケアを患者さんへ提供し、好循環をもたらしていると感じました。日本の病院でもこのような取り組みが出来れば看護ケアを受ける側とする側の双方にメリットができるのではないかと思います。</p> <ul style="list-style-type: none">・2点目は小児病院の施設見学をした際に「チャイルドライフスペシャリスト」という職業があり、活動内容について講義を受けて自分の病院でも取り組むことが出来れば良い効果を期待できるのではないかと思います。救命センターで勤務する中で小児患者の対応をすることもありますが、それ以上に小児を抱える親・兄弟(姉妹)が救急搬送されてくるケースがあり、見舞いに来る小児の対応に悩むこともありました。また、小児が危機的状況に陥った状態での死に対する受容や親・兄弟への受け入れについても貴重な意見を聞くことが出来たので今後活かせるようにしていきたいです。 <ul style="list-style-type: none">・3点目は自部署と関連した本場のER・ICUを実際に見学し、部署で使用されている資機材や運営・教育について現場スタッフから意見を聞くことが出来たことが良かったです。ER 見学で特に興味深いと思ったことはER内に精神患者などの収容出来る隔離部屋があり、警備員や院内ポリスが常駐していることでした。また、教育についても意見を聞き、新人からでも救急外来へいく事があるということに驚きました。新人でもすぐに現場へ行き馴染むことができるのも看護学校からのカリキュラムや指導が徹底されていることで臨床に出てもすぐに対応出来るものであり、自国でも取り入れたらより良い看護が患者さんへ提供されるものだと考えます。 <p>最後に多くの場所から集まったメンバーと1週間という短い期間ではありましたが、自分の中でも良い刺激になったことと貴重な縁ができたことを嬉しく思います。また、研修に携わって頂いたすべての皆様へ感謝いたします。</p>	